

筆名を変えた作家 —— 鬼子のこと

鷺巣 益美

鬼子について書く前にインターネットでも資料を探してみようと思い、キーワードを「鬼子」と入力して検索した。案の定、姜文監督の映画『鬼子来了』（一九九九年作品、中国・日本ともに未公開）はもとより、日中戦争時代の「日本鬼子」から今年四月に南シナ海で中国空軍機と接触事故を起こした「^{アメリカ}美国鬼子」の偵察機に至るまで、いちいち開けて確認などしてられないほど膨大な件数のホームページがヒットした。しばらく目次をめくったが、「作家・鬼子」に関連するものは見当たらなかったため、このルートで資料を探すことは断念した。

手軽な手段で情報を得ようとしたが、目指したものに簡単には行き当たらなかったというわけだ。まさかそこまで考えて、彼が「鬼子」と名乗ることにしたわけでもあるまいが。

一般名詞としての「鬼子」は、言うまでもなく中国人民に危害を加える外国人に対しての蔑称である。だが一作家の筆名としての「鬼子」には、この世のものではない者とかよからぬことを企む者といった、「鬼」という文字自体がもっているごく基本的な意味が込められているように思う。

さて鬼子という作家、初めから「鬼子」だったわけではない。一九八四年のデビュー以来、数年間は本名で作品を発表していたが、『収穫』一九九〇年六期に掲載された「古岸」以降、「鬼子」という筆名で作品を発表するようになった。それと同時に自らの出生年と民族名を明記することをやめた。小説にその作者の紹介が添えられていることがあっても、鬼子は「広西壮族自治区羅城の出身。男。一九八九年に西北大学（西安）を卒業し、現在は文学雑誌『漓江』の副編集長をしている」程度のことしか書かれていない。時々デビュー作とその掲載誌を記していることがあるので、その気になれば資料のみを頼りに彼の素性を探ることは可能なのだが。

全国規模の雑誌に作品が掲載されるようになって数年もたってから名を変えた作家は、近年珍しいのではないかと思う。作家として転機を計ろうと考えたのか、或いは「鬼子」という正体不明な者に転身しようとしたのだろうか。

ちなみに、現在手元にある鬼子の中篇小说集『苏通之死』（北京文芸出版社、二〇〇〇年）には、作者のプロフィールは次のように記されている。

鬼子、広西羅城の出身。背が高く髪が長い。西北大学中国文学科卒業。かつて大型文学叢刊『漓江』の副編集長をしていた。最近は中篇小説を主に創作、目下のところ張芸謀や陳凱歌とともに映画を製作中。『小説選刊』優秀小説賞と『人民文学』優秀小説賞を受けたことがある。現在、有名な都市・桂林に住む。

彼自身が自らの経歴を書いたものに「两点感想」（『三月三』一九九二年二期）、「一个俗人的记忆」（『作家』一九九六年五期）、「艰难行走」（『作家』二〇〇一年二期）があるが、全てどこにも本名を記しておらず、デビュー以前の出来事について明確に年代を記したものはない。もちろん、生まれた年さえも。

ここでは、上述したものをはじめとするいくつかの資料を照らし合わせ、生まれてから現在に至るまでの鬼子について、ざっと紹介していこうと思う。

一九五八年の国慶節のこと、広西壮族自治区の北部に位置する羅城県の農村にひとりの男児が生まれ、廖潤柏と名づけられた。五男一女の末っ子である。彼は三十三年後、「鬼子」の筆名を使うことになる。羅城県は八三年に羅城ムーラオ族自治县（自治区の中では河池地区に区分される）と改められたが、その裏にはこんな事情があった。

地区の名称に民族名を冠するには、その民族が地区の総人口の何パーセントかに達していなければならなかった。そこで、その家自体がムーラオ族ではなくとも、先祖三代に遡ってムーラオ族の血縁者が見つかったなら、希望すればみなムーラオ族として改めて申請できることになった。（「艰难行走」、以下「艰难」と略す）

ムーラオ族を名乗れば子供を二人生むことができるため、祖母に近い家系の人はみなムーラオ族になってしまったという。だが鬼子はその当時まだ結婚していなかったこともあり、申請しなかったらしい。

もし祖母が本当のムーラオ族ならば、父の身体には紛れもなくムーラオ族の血が流れていることになる。ところが母は正真正銘の壮族の女性である。だから誰かが私をムーラオ族に入れたときに、何ら反対する理由はなかったし、誰かが私のことを壮族だと言ったときにも、これまで黙ってきた。（「艰难」）

この文から判断するに、言いようによってはどうにでもなりうる「血筋」というものに

対して、鬼子はさしてこだわりを持っていないように思われる。

鬼子の妻は東北出身の満州族だが、彼らの息子が所属する民族の選択を迫られたとき、満州族の人は皇帝になったことがあるからという理由で、息子は満州族を名乗ることを選んだという。その息子が、生まれたときから中国語の標準語（原文は「汉语」、以下「標準語」とする）に囲まれた環境にいたことができたのは幸運だったと鬼子は記している。その理由のひとつは、鬼子が生まれた村では人々はもちろんその土地の言葉で喋ったが、学校ではまともに標準語を教えてくれなかったので、標準語を修得しようとするとかかなりの苦勞を強いられたからだ。もうひとつの理由は、息子の頭の中には「標準語」というひとつの言語体系しか存在しなくなるからだ。「標準語での執筆は私にとって、永遠に他人のはしごを借りているようなもの」（「艰难」）と鬼子は書いているが、生まれた土地の言葉で話すほどには、標準語では伝えきれないというもどかしさがあるらしい。

鬼子の前で初めて標準語らしき言葉を喋ったのは、アヒルやガチョウの羽を買い付けに来る商人たちだった。小学生の頃、菓草を売ろうとひとりこっそり街へ出かけたとき、買取人とうまく遣り取りをすることができなかつたため、鬼子は標準語の必要性を痛感する。この土地を出て、よその人ときちんと意思の疎通を図りたいのなら、彼らの言葉を身につければならないと考えたのだった。

教師の話す言葉は標準語に違いないと考えた鬼子は、まずは小学校の教師と積極的に話すことを試みた。ところが教師が標準語のつもりで話していたのはまったく使えないシロモノであることが判明する。その頃、都会から農村へ送り込まれてきた（所謂“插隊”）知識青年たちと喋る機会を得たからである。以来彼らが鬼子の「標準語の先生」となる。

彼らにしてみれば人生におけるひとつの災難だったが、私は心から彼らに感謝している。もちろん、まずは毛沢東同志に感謝しなければならない。彼がいなかったら、誰も自ら進んで私たちのところへ来て、何年も住もうなどとは思わなかつただろう。
（「艰难」）

と、皮肉交じりに当時のことを回想している。

高等学校卒業後の師範学校進学、さらにその後の山村の小学校への就職は、鬼子の意に添わぬものであつたらしい。師範学校卒業を控えた頃、街の高等学校に一人欠員があると教えてくれた教師がいたので期待を抱いたが、じっさい配属先が発表されたときに「良い人でも裏切る」ということを知る。

一九八四年、『青春』九期に発表した「妈妈和她的衣袖」が『小説選刊』十一期に転載され、その後数年にわたって『収獲』、『花城』、『民族文学』など主要文学誌に作品が次々に発表されるようになった。「このときから自分の運命は、雲が開きいささか日が差してきた」

(「一个俗人的记忆」、以下「一个」と略す) ように感じたのだった。

八四年末に県の文化館の文学指導係に転職した。八五年五月より七か月間、河池地区作家協会主催の文学講習会に参加。このときに中国作家協会広西分会への加入申請用紙を受け取ったが、提出はしなかった。指導者にはとりあえず書くだけでも書いておけと言われたが、周りの人に聞いてみると全省規模で発行されるような雑誌に三篇以上小説を発表していることが加入の資格だということで、あきらめてしまったようだ。

八六年に生まれて初めて北京へ行き、全国規模の文学大会に出席した。王蒙ら著名作家と一緒に記念写真に収まったことを喜ぶ出席者たちに嫌悪感を覚え、代金を払えなかったこともあり、その写真を鬼子は受け取らなかった。写真屋が「写真をもっていないのは誰？」と連呼する声に、鬼子は背を向ける。のちに「あの一枚の写真は、どこへ行ったのだろうか」と回想している。その後故郷に戻り、河池地区作家協会と三年契約を結んで専業作家となった。

八七年三月ふたたび北京に出て魯迅文学院で半年間学び、七月には西北大学を受験して合格、九月より二年間在学した。大学の在学期間が短いのは、師範学校卒業の資格が認められたためだろう。この頃子供が生まれたのと大学にかなりの学費を払わなければならなかったのとで、金銭的にかなり苦勞をしたようだ。大学院に受かったものの学費を用立てることができなかったため、合格通知を箱の中にしまいこみ「不滅の記念品」とした。

ところで先ほど述べた意に添わぬ師範学校進学について、もう少し詳しく記しておこう。高等学校卒業後に鬼子が荷物運びの仕事をしていたとき、偶然出遭った一人の元教師が大学入試出願の期日を教えてくれた。出願に出かけようとしたその日、途中で彼の行く手を阻む者がいたため「高加林(映画にもなった路遥の小説『人生』の主人公で、悲劇的な人生を歩むことになるインテリ青年)よりも惨めなことになった」(「一个」というのだが、具体的に何が起きたのかは不明である。理不尽な理由で鬼子の足を引っ張る人間がいたということなのだろうか。その結果、どうにか大学受験はしたようだが準備不足のため不合格となり、師範学校へ進むことになる。二年間の在学中は正月にも帰省せず、ひたすら勉学に励んだという。

鬼子が経済的な理由で大学院進学をあきらめなければならなくなったとき、最初にチャレンジした大学入試に通らなかったことは相当くやしく思われたに違いない。なぜならあのとき(おそらく文化大革命終結直後の七〇年代後半)大学に受かっていれば、学費はほとんどかからなかったはずだから。

ところで九九年の夏に、中国でこんなテレビ番組を見た。

村いちばんの秀才 A 君が、めでたく有名大学に合格した。だが A 君の家は母子家庭

で、莫大な学費（数千元だったと記憶している）を支払うことができない。母親は近所に借金を申し込みに行くが、そもそもそんな大金を所持する者がおらず、学費を立てるメドはつかない。入学手続きの締め切り日は近づく。A君はどうなるのか？

中国国内で発生している深刻な社会問題を取り上げた番組と聞きや、最後に「全国の皆さん、どうかA君のために募金を！」という呼びかけと連絡先のテロップが流れたのだった。A君だけにとっての解決策にしかならないだろうに、あまりに短絡的と思われるやり方にいささか戸惑いを感じた。

九九年のA君がその後どうなったのかは知るよしもないが、たぶん彼だけは進学を果たしたのだろうと思う。だが八九年の鬼子は、進学を断念せざるを得なかった。

九〇年七月に大学を卒業した鬼子は故郷にほど近い桂林に移り、漓江出版社で雑誌の編集をする傍ら小説を書くようになる。この年初めて「鬼子」という筆名を使い『収穫』第六期に短篇小说「古岸」を発表。翌年、同誌第五期中編小説「家癌」を発表した頃には「このあまり響きのよくない名前も、次第に他の雑誌にも受け入れられるようになった」（「一个」と感じていたようだ。九〇年以降は「生活のため」しばらく筆を休めたと自ら書いているのに、九一年と九二年に作品を発表しているのはどういうことなのだろうか。

九四年に雲南省で刊行された文学誌『大家』に思わず心を動かされ、前年に購入していたパソコンを使って書き上げた中篇「叙述传说」が、同誌の九五年一期に掲載される。「最近になってようやく、ほんとうに死にものぐるいで、ほんとうの意味での創作状態にはいることができるようになった。」（「一个」と書いたのが、九六年初頭のことである。

この頃にした中篇の幾つかが文壇で評価されたり、テレビ会社にシナリオの権利が売れたりしたようだ。今年に入ってからだったか、映画雑誌に鬼子の名を見つけたときにはわが眼を疑った。張芸謀監督作品『幸福时光』の脚本執筆者として名を連ねていたのである。鬼子を照らす日差しは、徐々に強くなってきているように思われる。

「艰难行走」で、以前と比べて自分の過去についてより詳細に触れたり、観念的なこともかなり書くことができるようになったのは、精神的に余裕を持てるようになってきたためなのだろうか。

鬼子の作品については、いずれ稿を改めて書くつもりである。